

第1回 ライトノベル作法研究所主催 大夏祭り大会 選評評価シート

作品名: 「満月と恋の話」

テーマ: 「引きこもりなのに、月に行くのが夢な美少女」

キャラクター

74

ストーリー

70

テーマ(設定)

75

文章力

70

構成力

60

商業性

62

・細かい点

○ 「恋にはおぼれても、海ではおぼれるな！」黒木先生の名言が面白く、キャラクターが立てられているという面でも非常に好評価。

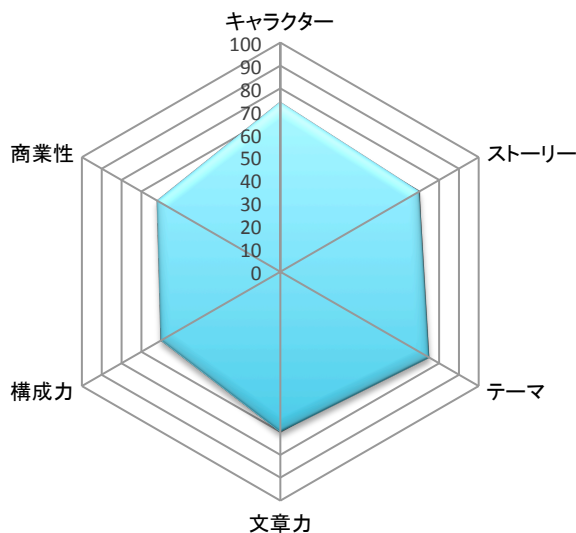
△ 「最初に自覚したのは～」からのファンタジー展開はあまりにも突然過ぎる。夢であることはファンタジー展開の中盤あたりで気付くことができるが、やはりこの章に入る前に「うとうとしながらスーパームーンの誕生を待った～」的な、眠気を催しているという情報提示が欲しい。

○ 2014年9月9日に現実に出現するスーパームーンをクライマックスにおいて物語を描ききったという点に感動した。まるでこの物語が今どこかで本当に起こっているかのような錯覚さえ感じる。時事性を取り入れて物語にリアル感を与えるという工夫は他作品には見られず、オリジナリティ溢れる非常に面白い試みであったように思う。+4

・総評

展開が少し素直過ぎるように感じる。女の子に告白され、他に好きな女の子がいるから振り、その子に告白しようと試みるという流れは予想がついてしまうので、例えば伏線を張るといった、読んでいる側に「驚き」を感じさせる要素が欲しかった。また最後まで生かさなかつた設定もいくつか存在し、もったいなささも感じた。その一つあげると、美化委員であるという設定は主人公と明日原の距離を縮めるための設定としてしか使われていないので、例えばキャンプの回想シーンで「未来の世界では地球が大气汚染やゴミであふれちゃって、地球人は高性能の宇宙船でいろんな星に移住するらしい。そのとき僕は月に住む。でもギリギリまで地球は綺麗に使いたいと思う」的な、「何故主人公がゴミを扱う美化委員に入ったのか」という背景が意外なところで繋がるといった構成をとれば素直なストーリーラインの中に驚きを感じることができたのではないかと感じる(今の例で作品が面白くなるかはやってみないと分からないが……)。ただその点を除いても、作品自体はまさに王道の青春物語の面白さを内包しており非常にわくわくしながら読むことができた。特にキャラクターはどれも個性豊かであり(その中でも特に黒木)、エンターテインメント性を兼ね備えた小説としても成り立っている。月をテーマにするというオリジナリティも非常に趣があり、月についてのトリビア的な知識がところどころに登場する点も読んでいてとても面白かった。

合計加点ポイント: 4



総得点: 411 / 600

B方式総合得点: 28554 点